



# 2025 年度日本語教育学会春季大会

2025 年5 月24・25 日／オンライン開催

【発表要旨】

## 目次

パネルセッション ①②…p.1～2

口頭発表：午前の部 ①～⑫…p.3～14／午後の部 ⑬～⑱…p.15～20

ポスター発表：午前の部 ①～⑨…p.21～29／午後の部 ⑩～⑬…p.30～33

## 日本語母語話者と非母語話者が共に学ぶ日本語教師養成プログラムのあり方とは

—非母語話者受講生のニーズや特性を活かす視点から—

川上尚恵・高梨信乃・朴秀娟・齊藤美穂

本パネルセッションでは、日本語母語話者（以下、母語話者）と日本語非母語話者（以下、非母語話者）がそれぞれの特性を活かしながら共に学ぶ日本語教師養成プログラム（以下、養成プログラム）のあり方について考える。パネル1では日本国内で養成プログラムを受講し海外で教える非母語話者日本語教師（以下、NNT）にとっての国内の養成プログラムの意義と課題を探り、パネル2ではNNTがもつ不安と利点を述べ、それらを養成プログラムにどう活かすことができるのかを論じる。そしてパネル3では日本語教育実習生（母語話者・非母語話者）それぞれが捉える自らの「強み」や、異なる背景をもつ実習生が相互に与える影響について考察を加える。以上の個別発表での議論をふまえ、日本国内の養成プログラムにおいて母語話者と非母語話者受講生がそれぞれの特性を活かし、学び合う養成プログラムとはどのようなものかについて討論したい。

(川上—神戸大学, 高梨—関西大学, 朴—神戸女学院大学, 齊藤—神戸大学)

## 看護介護現場の外国人の用語習得の難しさ

丸山真貴子・遠藤織枝・吉永尚・佐藤和也・龔佳奕

かつて読売新聞(2018)でも取り上げられたことがあるが、介護現場で働く外国人にとって介護用語習得は大きな負担になっている。その後教材の開発や効果的な指導法の試みなどもなされてきているが、多くは、現存の用語を当為として踏まえて、その習得支援を目指している。一方で、現実に外国人従事者が負担と感じている内実が、既存の語彙の習得に限られているのか、他にも別の要因があるか、については明らかにされていない。本パネルでは、実際に国家試験を経験し、介護士として従事した当事者から現場の用語の複雑さと習得の困難さを指摘する。ついで、日本語支援の立場から教材研究とアンケート調査により判明した用語の不統一の実際を報告し、実態を踏まえた現実的な善後策を検討したいと考える。

(丸山—目白大学, 遠藤—にほんごの会, 吉永—園田学園大学, 佐藤—ミャンマーサンコウ, 龔—千葉大学大学生)

## マルチモーダル AI 分析による次世代型日本語聴解学習支援システムの開発研究

王睿琪

本研究は、第二言語習得研究における聴解評価の方法論的革新を企図したものである。Van Dijk & Kintsch (1983)の理論的知見を基盤としつつ、従来の多肢選択式テストやクローズテストが内包していた聴解プロセスの質的把握の限界性を克服すべく、マルチモーダル分析の理論的フレームワークを構築した。具体的には、口頭再生法を援用しつつ、アイディアユニット単位での分析および再生率による理解度の可視化を実現する三モジュール構成のシステムを開発した。JFL 学習者 10 名を対象とした実証研究において、研究者評価と AI 評価の間に高い一致度 ( $\kappa=0.69$ ) が確認され、システムの有効性が立証された。本研究の意義は、従来の評価法では捕捉し得なかった学習者の言語理解の質的側面を明示化する新たな分析枠組みを提示した点にある。今後の課題として、学習者の言語熟達度の差異や教材の多様性を考慮した検証が必要である。

(王—東京外国語大学)

### 専門領域に特化した視聴覚教材の自動生成と評価の試み

—生成 AI と JF スタンダード Can-do を活用した日本語教育支援—

甘利実乃

近年, 看護や工学など専門分野で日本語を学ぶ需要が高まる一方, 従来の教材開発はコストや IT スキルが課題であった。本研究では, 深層学習を利用した生成 AI と JF スタンダード Can-do を組み合わせ, 専門用語を正確に含む視聴覚教材を効率的に作成する方法を提案する。医療系日本語教師への評価では, 用語正確性 85%, 修正時間約 15 分で実用可能との肯定的意見が得られた。また, Can-do を活用することで, 学習者の到達目標を明確化し, レベル別の教材設計が容易になるという利点も認められた。本研究により, 教師の作業負担が大幅に軽減され, 学習者の多様なニーズに応える個別化学習の展望が開けることが示唆された。一方, 一部で背景説明不足や著作権・誤生成抑制の課題が残る。今後は学習者対象の大規模検証と複数分野での応用を進め, 教材作成の最適化と日本語教育の高度化を目指す。更なるデータ解析も行う予定である。

(甘利—東京外国語大学大学院)

## COIL (オンライン国際協働学習) の実践報告

ーバーチャルツアー・プロジェクトを通してー

三戸勝・橋本拓郎

香港大学とハワイ大学では、2022年9～11月にかけ、人が移動せずに「他の手段でつながることで国際的な知見や感覚を培い、グローバル人材教育を行う」(池田 2020) COILを導入したプロジェクトを行なった。本実践では、両校の学習者が自身の街を紹介する Google Street View のようなバーチャルツアーを作成し、Zoom でその過程や成果をパートナー校に計3回口頭発表。海外の学習者との協働を通して、自文化と異文化の理解を深めるとともに、デジタルスキル、プレゼンテーション能力、就職力の向上を目指した。海外の学習者とともに発表とフィードバックを繰り返す中で、多様な視点に気づき、異なる背景を持つ人たちとの協働力が培われた。プロジェクト後の調査では、協働力、提案力、デジタルスキルの習得が高く評価された。本研究は、日本語教育への COIL の効果的な導入に貢献することを目指す。

(三戸ーハワイ大学, 橋本ー香港大学)

## ベトナム人日本語学習者の促音知覚

—脳波に現れる事象関連電位 P300 を指標として—

三浦景星

本研究は、ベトナム人日本語学習者が促音をどのように捉えているか行動データと脳データ(事象関連電位)から検討したものである。ベトナム人日本語学習者 11 名と日本語母語話者 4 名に対して 2 種類の課題を実施し、促音の有無を判断する傾向とアクセント型の違いによる知覚への影響を測定した。ベトナム人日本語学習者は日本語母語話者と比べて正答率が低く反応も遅かったが、特に促音がない場所に促音があると感じる傾向が顕著であった。このことから、促音をベトナム語の音節構造でいうところの末子音として捉えている蓋然性が示唆される(例: 音/oto/ → /ot to/, 悪化/akka/ → /ak ka/)。また、「促音がない」刺激を検出するタスクでは日本語母語話者とは異なる潜時に、アクセント型の違いによって惹起したと考えられる P300 が出現したことから、促音かどうかの判断が難しい場合に母語の音声知覚システムを援用した結果、母語の声調からの影響を受けた蓋然性が示唆される。

(三浦一立命館大学大学院生)

## 友人間 LINE チャットにおける発話スタイルの同調

岡崎 渉

本研究の目的は、友人間テキストチャットにおいて発話スタイルが同調する現象の実態を明らかにすることである。データに用いたのは、同年代友人同士 13 ペアによる、1 年間で実際にやりとりされた LINE チャットの履歴であり、メッセージ数の合計は 24,763 であった。分析の結果、各種句読記号（「笑」「w」「♪」「♡」等）や絵文字、スタンプといった感情表現記号について、それぞれの使用率およびすべての感情表現記号を合わせた使用率はペアの話者間で近似する傾向が見られた。また、ペアの両者が特定の感情表現記号を、文末形式などの特定の言語的要素とともに、互いに近接した位置で用いている例も多数観察された。こういった結果から、対等な親しい相手とのテキストチャットにおいて、話者は相手と発話スタイルを同調しようとする傾向のあることがわかった。

(岡崎—鳴門教育大学大学院)

## 日本語学習者はどのように暗示的な主題・焦点を表しているのか

中西久実子

本発表では、日本語学習者が日本語の暗示的な主題・焦点をどう表しているのかという使用実態を明らかにした。論証に使用したのは、I-JAS と学習者（中国語、英語など）約 90 人を対象にした筆記テストのデータである。調査の結果、暗示的な主題を表す場合、日本語母語話者が「が」を使う箇所、学習者は「は」を使った文を使うことが多いということが明らかになった。たとえば、(1)の学習者の答えでは「は」を使って「彼は洗う。」となることが多い。このような場合、母語話者の日本語では、「彼が洗います。」のように「が」を使う。

(1)母語話者：あら、誰が洗うんですか？

学習者：誰、えー彼は洗う。

上記のように暗示的な主題を表す文で学習者が「は」を使いがちなのは、「は」「が」を文型の一部としてセットで暗記していることや、「が」格の格成分以外の成分の有無など様々な要因が関与していると考えられる。

(中西－京都外国語大学)

## 視線位置情報を取り入れた日本語の指導法

—日本人学生と日本語学習者のアイトラッキング調査と頻出表現の分析を通して—

佐古恵里香・山内信幸

本発表では、日本人学生と日本語学習者にある状況（入れる、落とす、降る、沸く等）のイラストを提示し、得られた視線位置情報と述部表現の分析から、日本語指導における視線位置情報の活用の必要性を提唱する。具体的には、視線位置計測機を用いた調査と作文調査を実施し、日本人学生、中国人学習者、ベトナム人学習者の3群間の頻出の視線位置と述部表現（誤用、述部の種類、テンス・アスペクト）を抽出し、これらを変数として、統計ソフトRで分析する。残差分析の結果、3群間の視線位置と述部表現の一部に有意な差異が認められると同時に、一定の類似性も観察され、視線位置（入力刺激）は産出文に影響を与えている可能性が導かれる。また、頻出視線位置（注視点）と頻出表現には相関があり、注視点は「言語化されやすい」という傾向が観察される。これらの結果から、視線位置情報の活用と日本語レベルに応じた述部表現の指導法の必要性を主張する。

(佐古—流通科学大学, 山内—同志社大学)

## ストーリーテリングタスクにおける日本語学習者の流暢さの発達

—ポーズ、言い直し、繰り返しの比較から—

曾 子芸

本研究は、北京日本語学習者縦断コーパス (B-JAS) のデータに基づいて、大学で4年間日本語を専攻する17名の学習者のストーリーテリングタスクにおける発話の流暢さ (1 ポーズあたりのポーズ時間, 1 文あたりの言い直し数, 1 文あたりの繰り返し数) がどのように発達していくのかを明らかにすることを目指している。分析ソフト HAD による多重比較の結果, ポーズ及び繰り返しにおいて, 1年次と2, 3, 4年次の間に有意差が見られた。また, 言い直しにおいては, 1年次と2年次の間に有意差が見られないが, 1年次と3年次, 1年次と4年次の間に有意差が見られた。以上のことから, 日本語学習者の発話のポーズと繰り返しは2年次から著しく進歩が見られるのに対して, 言い直しの進歩が見られるのは3年次の時であることが分かった。この結果から, ポーズと繰り返しの発達は, 言い直しに比べて早いと考えられる。

(曾一広島大学大学院生)

## 感覚・感情を表すオノマトペの効率的指導についての一試案

—教材開発を視野に入れて—

吉永尚

感覚や感情を表すオノマトペは医療福祉現場などで多用されるが指導は十分とは言えない現状である。オノマトペの効率的指導のため、使用頻度が高く習得がぜひ必要と思われる必修語を選定し、習得を促進するための学習用アプリ教材を提案する。

本研究では、医療福祉関係者を対象に感覚や感情を表すオノマトペの使用に関する親密度を調査し、親密度が最も高いものから30語を選定した。これらは医療福祉現場で多用されるオノマトペと考えられ、習得がぜひ必要な必修語と判断する。感覚や感情を表すオノマトペは日本語による説明だけでは細かいニュアンスが伝わりにくく、母語との対照が有効である。また、音象徴の観点で母語とは大きく異なる場合が多く、習得には音声的な反復練習がぜひ必要である。効率的な学習教材として、母語による意味解釈の補助と音声の反復練習を通して体感的に必修オノマトペ30語を習得することを目的とする学習用アプリ教材を開発した。

(吉永一園田学園大学)

## 性に焦点化した日本語教育実践のあり方

—きれいごとでは済まされない現実を起点として—

萩原秀樹

性はすべての人、日本語学習者の生(ライフ)に直結し、あらゆるライフステージで向き合うテーマである。だが、本実践に向けて受講生が満足感とともに語る肯定的な言葉と実践内容を共有する教員が示す反応には、明らかな温度差がある。それは性というテーマを通して見える学習者と教員の認識の乖離であり、そこには日本語教育の課題が見える。そこで本発表は実践の具体的内容の紹介や意義に加え、教員側の姿勢をその語りから読み解く。そして本実践を日本語教育の中にどう位置づけ、展開するのが学習者の豊かなライフキャリアの実現に有効か、そのあり方を日本語教育参照枠に触れつつ論じる。

日本語教師は本テーマの専門家ではないが、それでも十分に果たせる役割や意義深さ、第二言語教育ゆえの利点が見なせる本実践は、現実社会との連関を求める参照枠の主旨に沿う。日本語教育は学習者の生の中にあり、社会と不即不離の関係の中であってこそ存在意義がある。

(萩原—インターカルト日本語学校)

## 国立高専中四国ブロック日本語教育等支援拠点校としての留学生支援

山田朱美

津山高専は中四国地区日本語教育等拠点校として、留学生の日本語教育支援、メンタルケア等に取り組んでいる。まず中四国 13 高専と留学生にアンケートを実施して得られた結果が下記 2 点である。(1) 日本語能力が足りず、授業を受けるのに支障のある留学生の存在 (2) 学校、クラスに溶け込めず、孤立感を感じている留学生の存在。年齢と背景の多様化が、上記 (1) (2) の原因になっていると思われる。具体的な取り組みは以下のとおりである。(1) に対しては、①オンライン日本語支援 ②対面集中講義 ③実験レポート作成能力向上のための教材開発 (2) に対しては、①オンラインイベント ②対面合宿 ③イングリッシュカフェ、さらに留学生支援を通じての日本人学生の国際化を狙い、チューター研修、ピアサポートも実施している。これらの取り組みを紹介し、成果を報告する。特に、日本人学生の国際化への貢献および高専教員間の横連携の在り方に関して考察する。

(山田—津山工業高等専門学校)

## 海外における CLD 児の子育て及び支援経験者の語りにみられる課題

— 「CLD 児の子育て対話カード」の作成を目指して—

高橋佳奈子・荻田朋子・岩永府子

筆者らは CLD 児の保護者・支援者の抱える課題解決のため、2022 年 7 月から現在まで月に 1 回オンラインでの対話の場を企画・運営してきた。実践を通じて、子育てに関する語りはセンシティブな話題を含むことも多く、状況や相手によっては経験を直接共有することに抵抗を感じる場合があるという課題が見えてきた。本研究では、このような課題解決のため、「CLD 児の子育て対話カード」の開発を目指し、実践で得られた海外 6 カ国において CLD 児の子育て・支援を経験した 9 名の語りを分析し、共通する課題を明らかにした。分析の結果、17 のカテゴリーが生成され、その中で国や地域を超えて重なりが多い 5 つのカテゴリーを抽出した。本発表では、これらのカテゴリーごとに詳しいストーリー構造の共通性を紹介する。CLD 児の子育て対話カードの開発により、CLD 児への理解が深まり、多文化共生社会における共助のきっかけが生まれることが期待される。

(高橋—アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター, 荻田—大阪大学大学院生, 岩永—フリーランス)

## TOWL3 を基盤とした日本語作文評価基準の検討

—外国ルーツ高校生作文の分析—

深石葉子・松本理美

本研究は、簡易に判定できる外国ルーツ高校生を対象とする日本語作文の新たな評価基準策定を目指し、評価基準試案（以下、試案）を作成し、外国ルーツ高校生作文と小中高の国語教科書を対象に、試案の有効性の検証を目的とする。試案は、Test of Written Language-3 (Hamhill & Larsen, 1996, 以下、TOWL3)をベースに用い、ライティング基本 10 点、文法等 23 点、ストーリー構築 17 点の 3 つの観点で合計 50 点満点とした。外国ルーツ高校生 A の作文計 20 本の評価は、約 2 年 5 カ月で 15 点→36 点と顕著に上昇した。いずれもほぼ満点であった国語教科書の結果から、試案は一定のレベルを超えると違いがでないことが確認された。一方、外国ルーツ高校生作文の評価は、日本語能力向上に伴い右肩上がりとなり、外国ルーツ高校生の作文判定基準としての有効性が明らかとなった。さらに、得点が伸びなかった項目に着目した作文指導（例えば、段落や連体修飾節を用いる指導など）が作文力の向上に繋がることが示唆された。

(深石—立命館大学大学院生, 松本—大阪樟蔭女子大学)

## 課題遂行型シラバスの日本語授業における教師の意識変容

—指導用手引きの効果—

渡部裕子, 大石寧子, 浅見恵子, 榎原恵美, 三浦優子

課題遂行型シラバスの就労日本語の授業で指摘されている問題点の改善策として、遂行すべき課題の種類によって、授業における到達目標への道筋が授業展開や練習で異なることを可視化できる指導用手引きが挙げられる。そこで、授業内容を「理解中心のやりとり」「定型表現の発話」「自分で内容を考える発話(人間関係構築/業務遂行場面)」「習得すべき語彙・表現が多い課題」「読み・書き中心」に6分類して各授業展開例を示した手引きの効果を検証するため、質問紙による教師の意識調査を行った。その結果、9割以上が「課題遂行型シラバスを使っただけの授業のやり方が理解できた」、7割以上が「学習者が何も見ないで、自分の状況に合わせて話ができるようになった」と効果を述べ、授業展開例が示されていない課についても、6割以上が「6パターンの同分類掲載課が参考になった」と答えており、教師自身による授業分析にも一定の効果があったと考えられる。

(渡部—東洋大学, 大石—元徳島大学, 浅見・榎原—日本国際協力センター, 三浦—元日本国際協力センター)

## オンライン日本語教師による授業記録の活用実態に関する調査結果の報告

－日本語教育における授業記録のあり方に関する考察－

樋佳世

本発表の目的は、日本語教師と学習者の協働の記録として授業記録が果たしうる可能性を考察することである。まず日本語教師を対象にアンケートおよびインタビューを実施し、授業記録の活用実態を調査した。その結果、授業に関する情報に加え、学習者の状況や教師自身の感想等が記録されていることが分かった。また、多くの日本語教師が次の授業準備等のために授業記録を読み返していることや、授業に関するアイデアを得る等の目的で他者の授業記録を参考にしていることも分かった。インタビュー内容については「質的データ分析法」を参考に、事例－コードマトリックスに準じた分析を行った結果から「経験と参照」「教師の不安や戸惑い」「学習者との接点を模索」という3つの概念的カテゴリーを抽出した。本研究の意義は、多様なライフステージにいる学習者を指導する日本語教師の授業記録を研究し、教師の成長に有効な授業記録のあり方を示唆する点にある。

(樋－メタノイア)

## 日本語上級話者における講義聴解の推測技術

阪上彩子

本研究の目的は、思考発話法を用いて日本語上級話者における講義聴解の推測技術を明らかにすることである。調査協力者は、上級学習者 17 名である。調査は母語か母語に準ずる言語で行った。その結果、上級学習者は聞いた内容がわからないとき、「音声」「文法知識」「前後の文脈」「既有知識」「スライドや黒板」の 5 つの手がかりにして推測していることがわかった。

上級学習者が「音声」を手がかりにするとは、漢字の音や知っている語からわからない語の意味を推測することである。しかし、音声を正確に理解できないとき、不適切に推測することがある。「文法知識」を手がかりにするとは、わからない語と知っている語に関係する文法知識から語の意味を推測することである。しかし、わからない語の直前や直後の語の意味も正確に理解できないとき、不適切に推測することがある。

(阪上一奈良教育大学)

日本語学習から始まった市民性形成  
—難民認定者へのインタビュー調査から—

片山奈緒美

本研究は、急な政変によって難民として来日したアフガニスタン人女性に対し、来日後の日本語学習と市民性形成に関するインタビュー調査を行った。調査協力者は来日後に日本政府から提供された難民認定者向けの日本語プログラムでの日本語学習を通じて日本の文化や習慣を学んだ。さらに妊娠・出産・育児・就労といった個人の活動や社会生活から成るライフキャリアを積み重ねる過程において、協力者は他者と関わりながら自覚的に日本社会で生きていく「市民性」(citizenship, シティズンシップ)を形成していった。時間を置いて行った3回のインタビューから、協力者が来日以来どのような市民性を形成してきたのかを捉え、日本語教育や自律的な日本語学習が難民認定者の定住と市民性形成に与えた影響や、観察された日本語教育の課題について明らかにしたい。

(片山—東洋大学)

## 海外の中等教育段階における日本語教育支援策の策定手法に関する一考察

—スペインと英国の事例を基に—

大船ちさと・平川俊助・関根千紘

国際交流基金によると、世界の教育機関で日本語を学ぶ約380万人の半数が中等教育機関の学習者で、その数は増加傾向にあるというが、これは他言語と比較した相対的なものではない。スペインと英国の中高生には日本語学習のニーズがあるものの学習機会は増加しておらず、英国ではむしろ減少傾向にある。その背景には構造的な課題が存在する。そこで、このような状況下に中等日本語教育の包括的支援策が如何に策定されているかを、スペインと英国の事例を基に考察し、支援従事者の実践知の可視化を試みた。その結果、課題の全体像を俯瞰的に捉え、個々の課題に直接的、間接的に効果をもたらす取り組みを複数行い、将来的に事態が好転するよう企図されている点が共通項として浮かび上がった。これはシステム思考に基づいた策定ともいえる。このような実践知の共通性の描出は、海外に赴く教員に求められる資質・能力の可視化にも将来的に貢献するものと考えられる。

(大船—国際交流基金日本語国際センター, 平川—国際交流基金マドリード日本文化センター,  
関根—学習院大学大学院生)

## 日本語教育実習における実習生の自己評価と意識の変容

張瀟尹

日本語教育における人材育成と質の向上が求められる中、実践研修が必須となっている。実習での学びを深めるためには実習を振り返る内省とそれによって得られる気づきが不可欠である。しかし実習生の属性の多様化に伴い、彼らが経験した具体的な状況や学びのプロセスについての研究は少ない。そこで本発表は教授経験のない実習生に着目し、彼らの自己評価や意識変容の要因を分析した。

実習生は「授業準備」「教室の雰囲気」「授業の進行」「学習者の反応と習得状況」「自身の授業時の状態とパフォーマンス」に着目し、自己評価していた。初期には指導技術に苦しんでいたが、実習を重ねることで改善策を見出し、学習者の背景やニーズを理解し、授業内容を調整する能力が向上した。特に非母語話者の実習生は自身の母語を不安に感じていたが、学習者の真摯な姿勢に触れ、自己肯定感を高めた。自信の向上、内省、指導教員や実習生同士との対話が意識変容を促進した。

(張一フリーランス)

## 移民・難民の言語習得とケイパビリティ

—社会経済的包摂への展望として—

工藤理恵

本発表では、移民・難民の言語習得の課題を、ケイパビリティ・アプローチの観点から検討し、社会経済的な活動における言語習得の位置付けを明らかにすることを目的とする。本研究では、群馬県館林市のロヒンギャ民族及びミャンマーイスラムのコミュニティを対象に調査を実施した。その結果、移住第一世代の日本語習得状況は社会経済的な活動の幅と相関があること、親子の情緒的親密さと親の日本語習得に結びつきが認められること、移住第二世代のルーツ言語習得機会の制約が選択肢に影響を与えていることが明らかになった。これらの知見は、経済的自立支援と一体化した言語教育、家族全体を視野に入れた支援体制の構築、ルーツ言語・文化の学習機会の確保の必要性を示唆している。これらの知見を踏まえ、日本社会で困難な状況にある人々を射程に捉えた言語教育・言語政策について、多様な視点からのご意見をいただき、議論したい。

(工藤—フェリス女学院大学)

## 読解授業時の学習者の内言

—社会文化理論に基づくアプローチ—

加藤伸彦

本発表は、日本語中級レベルの読解授業時の学習者の内言を社会文化理論に基づき、思考リスト法を用いて調査した結果を報告するものである。社会文化理論では、思考のための道具の1つとされる。よって、授業時の学習者の内言の調査は、学習者の思考の一端を明らかにすることにつながり、教師と研究者の双方にとり有益であると考え調査を行った。調査期間は2024年10月31日と12月19日である。協力者は7名、多国籍である。

調査の結果、1. 全ての活動で日本語が内言として使われていること、2. 思考、学習、他者とのコミュニケーションのために日本語が内言として使われていること、3. 積極的に日本語の内言を使おうとする意識が見られること、4. 文章あるいは問題として提示されている日本語が内言として使われていること、5. 学習者によって内言の使用頻度が異なること、6. 活動ごとに内言の使用頻度が異なることの6点が明らかになった。

(加藤—京都外国語大学)

## 留学生を対象としたキャンパス体験型日本語学習 RPG の開発と実践報告

麻子軒

本発表では、発表者が留学生向けに開発したキャンパス体験型日本語学習 RPG について、その設計方針と実践報告を行う。本ゲームは、留学生が主人公となり、キャンパス内を散策しながら日本語クイズを解くことで言語知識を復習し、依頼されたクエストを遂行することで言語運用能力を向上させることを目指している。また、大学生活を仮想的に体験できる内容を取り入れることで、異文化理解の促進も図る設計となっている。本ゲームは、K 大学留学生別科の入学前教育コース (2024 年 9 月入学) のオプションコンテンツとして提供され、入学者 58 名中 30 名が体験した。参加者からは「寮や学校の構成を知れた」といった大学環境を事前に体験できたことへの肯定的な意見や、「もっとクイズを入れてほしい」といった学習コンテンツへの期待感が寄せられた。一方で、「もっとヒントがほしい」といった意見もあり、ゲーム初心者に向けた改善の必要性が示唆された。

(麻一関西大学)

## 大学生と創る子どものための複言語複文化教材

—全学オープン科目の実践報告—

太田裕子

本発表は、多様な専門領域の大学生・大学院生を対象とする全学オープン科目、「複数言語環境で成長する子どものリテラシー」の実践報告である。本科目は、複数言語環境で成長する子どもたちの経験や、言語能力に関する理論と複数言語教育に関する事例を理解した上で、子どもの複言語複文化能力を伸ばすためのトランスランゲージング教育実践案と複言語複文化教材を作成することを目標とする。履修者によるレポートの分析から、履修者が本科目を通して、自分はどのような社会や教育を構想するのか、複数言語環境で成長する子どもに対して自分に何ができるかを、市民として考え行動するための視点と姿勢を得たことが分かった。多様な専門領域の学生に開かれた全学オープン科目において日本語教育に理解ある市民を育成し、履修者の複言語複文化能力を活用して世界の子どものための複言語複文化教材を開発する本教育実践は、日本語教育の可能性を広げる意義がある。

(太田一早稲田大学)

## ある在日フィリピン人介護福祉士が利用者への想いをもとに実践した介護

田鎖楠奈

本研究の目的は介護歴 13 年の在日フィリピン人介護福祉士マイカさん（仮名）が①どのような想いで介護に従事しているか、②①はどのような日本語を通して介護実践として表出しているかを明らかにすることである。ライフストーリー研究法を用い調査分析を行った結果、彼女には①【利用者本人の希望に寄り添った支援をしたい】【最期は家族と繋げてあげたい】【利用者の健康状態について気づいたことは他職員や利用者家族へ正確に伝えたい】【亡くなった利用者へしっかりお別れしたい】という想いがあり、②既存の日本語力を活かしつつ新たに習得した表現で周囲とやり取りしながら<利用者への希望の聞き取りと職場への共有><利用者家族への電話での報告><利用者家族面会時における両者への声かけ><担当者会議における意見交換><スマートフォンを活用した記録><葬儀における弔辞の読み上げ等の介護実践>を通して利用者やその家族へ想いを伝えていた。

(田鎖一東北大学大学院生)

## 言語発達の観点からみた大人のナラティブの特徴

稲葉みどり

本研究では、大人の物語文（ナラティブ）を言語発達という観点から分析し、その特徴を考察した。これまで、筆者は日本語を母語とする3歳から11歳までの子どもの物語文を分析し、言語的特徴、談話構造等の発達過程を明らかにした。そこで、ここでは大人の物語文を子どもの言語発達の一つの到達点（目標言語）と考え、その特徴に着目した。参加者は大人、及び、9歳児、11歳児である。発話資料は、文字のない絵本を用いて収集した口頭作話で、KH Coder 3（樋口, 2020）を援用したテキストマイニングにより解析した。主な結果として、大人の物語文は発話量、語彙数に個人の差異が大きく、絵描写、直接話法、擬声語・擬態語等の言語表現、話者の視点の変換、本筋からの脱線、オープンエンド等による多様なスタイルが見られることが特徴で、それらにより物語の独自性、個別性、創造性が醸し出されていることが分かった。

(稲葉—愛知教育大学名誉教授)

## 日本語教師が経験した「違和感」を協働的に振り返る実践

—協働オートエスノグラフィの記述をとおして—

齋藤郁恵・杉島夏子・風間祐月

オンラインで日本語授業のデザインを担当することになった筆者らは、これまでの日本語教師としての経験を互いに知るため、語り聴く場を複数回設けた。本発表ではそのうちの1名に焦点を当て、彼女の語りを協働オートエスノグラフィ（以下CAE）の手法を用いて示す。CAE記述のプロセスをとおして、彼女はこれまでのキャリアで度々「違和感と向き合う経験」をしており、それが現在の彼女の教育観の形成に重要な意味を持っていることが明らかとなった。これらの違和感は①日本語教師の多くが社会的・制度的制約の中で教授活動を行っていること、②日本語教育が「日本語を教える」という狭義で捉えられがちであり、広く社会と繋がれていないことに起因しているのではないかと考察した。本ポスター発表をCAEの特徴である対話と記述を繰り返すプロセスの一貫として位置付け、参加者との対話の場としたい。

(齋藤—フリーランス, 杉島—東北学院大学, 風間—フリーランス)

## 中国における日本文化教育の役割

—教師の認識に着目して—

成利楽・道法愛

中国における日本語教師は、日本文化教育を実施する目的についてどのような認識を持っているのかを調べるために、中国の大学日本語教師（103名）を対象に日本文化教育の役割を問うアンケート調査を行った。因子分析の結果、中国で日本文化教育に携わる教師が日本文化教育の役割を、①学習者の日本文化関連の認知力の向上、②学習者の日本文化関連の実践力の育成、③文化教育を媒介とする言語教育力・学習力の向上、④学習者の異文化適応力の向上、⑤中国文化の発信、⑥自国文化の再認識の6つの構成概念となっていることが分かった。今後、教師と学習者の成長を両方に視野に入れた文化教育関連の教師研修の充実、日本語教師に日本語や日本文化だけでなく、中国語や中国文化関連の知識を学ぶ機会の提供が求められるだろう。

(成一立命館アジア太平洋大学, 道法—広島大学)

## 進路指導における教師の不安要因

—インタビュー調査からわかること—

濱川祐紀代・倉沢郁子

本発表は、日本語学校での進路指導で日本語教師が感じる難しさや不安等について明らかにしようとするものである。調査は産業カウンセラーの資格取得者が、カウンセリング手法を用いながら半構造化インタビューで行った（オンラインで1時間程度）。調査協力者は進路指導の経験がある日本語教師で、事前アンケートの段階で不安を自覚していた2名を対象とする。

分析にはまず SCAT（大谷 2019）を用い、①不安の対象、②将来像の描き方等の共通項が見られた。分析の結果、進路指導に困難や不安を抱えている教師は、進路指導ができていないのかという職務遂行に関する不安があること、進路指導を進めるには教師が学習者の背景を知っている必要があること等が明らかになった。今後は、教師個人の情報収集力や努力に頼るのではなく、「チーム学校」（三村 2004）で基本的な指導の流れを共有し、情報共有の仕組みを作る等、学習者に寄り添う体制を作っていく必要がある。

(濱川—早稲田大学日本語教育研究センター, 倉沢—関西外国語大学)

## 動詞が持つ構文情報の指導に向けて

—動詞が取る項構造パターンの指導効果の検証—

三好裕子

動詞が持つ構文情報を身につけることは、学習者が表現活動を行う上で重要である。本研究では動詞の意味のカテゴリーごとに項構造パターンを示す指導の効果を実験的に検証した。調査では、「入れる」のように「もの/人を場所にV」の構文を取る移動の動詞群と、「変える」のように「もの/人を状態にV」の構文を取る変化の動詞群を用意し、各動詞群について項構造パターンを示した学習シートと例文を多く示した学習シートを作成した。協力者グループ毎に動詞群と学習シートの組み合わせを変えた。事後テストとして適切な助詞の選択問題をさせ、アンケートとインタビューも行った。事後テストでは、シートに提示しなかった動詞の問題についてパターン有シートで学習した場合の正答率が高いことが確認された。また、変化の動詞で、パターンの効果が明らかであった。アンケートではパターンの指導に好意的な反応があった一方で、シートの修正点の指摘も多かった。

(三好一早稲田大学日本語教育研究センター)

## 運筆的な困難さに対処する漢字を書く能力向上を促す指導法

セルゲエワ・アナスタシア

本発表の目的は、非漢字系大学学士課程の日本語専攻学習者が漢字の習得プロセス上直面する運筆的な困難さとその解決方法の考察結果に基づく指導法を提案することである。運筆困難さを解決する方法として完成度の高い点画分類体系を構築し、それに基づく漢字表記の指導法を実施して指導結果を漢字表記前後テストで検証した。指導または調査期間は3か月間。対象者は日本語初級の大学1年生である11名のロシア人。調査結果はどの学習者も丁寧な点画の書き方で字の形がよりよく整えて分かりやすい漢字が書けるようになった。指導成果は前後テストの写真で示される。作成した点画リストが完成されたもので、その理論と実践を習得した学習者は将来新しい漢字を学習する時も、字形の正しい書き方を自律的に把握でき、また個人的な運筆能力を自己評価して向上させることができる。

(セルゲエワ—京都外国語大学大学院生)

## 中国人日本語学習者に見られる促音挿入の実態と生起要因

—中国北方方言話者を対象として—

王 宇琪

本研究は中国北方方言話者の日本語学習者(以下, 中国北方学習者)を対象とし, 中国北方学習者における促音挿入現象とその原因について探究した。研究結果として, 中国北方出身の学習者 16 人のうち 14 人は, 日本語の無声子音を有気音とし, 有声子音を無気音として発音しており, 語中子音の VOT が長くなり, 促音が挿入されたように聞こえることがわかった。一方, 残りの 2 人の発音は自然さが高く, 促音の挿入現象はほとんど見られなかった。アンケートの結果から, この 2 人のうち 1 人は音声学を学んでおり, 日本語の無声・有声子音と中国語の有気・無気音の違いを理解していた。もう 1 人は, 日本語先生の無声・有声子音の正確な発音をよく真似していたため, 自然な発音が身についていた。このことから, 教師が日本語の有声・無声子音に対する理解を深め, 適切な発音指導を行うことが, 中国北方学習者にとって非常に重要であると言える。

(王一関西外国語大学)